

倉馬の里に記念植樹

倉馬の里が10周年を迎え、記念植樹をすることになりました。伊藤さん、山崎さんを中心にあの木がいい、この木がいい、シンボルツリーにしようかといういろいろな案が出ましたが、イチヨウ、金木犀、楠、山桃、李、ポプラ、南木を3月12日午後から植えました。7名で穴掘りから開始、竹根がはびこり、山土が硬く思うように掘れず苦勞しながら植えました。松浦さんの指導で根が動かないように杭を打ち、「頑張っておおきくなつてね」と独り言を言いながら麻紐で固定しました。植え終わつた後、やっつと嬉しくなりました。

友達に記念樹の話したら、是非柚の木を植えて欲しいと預かってきましたので一緒に植えました。これから倉馬の里に行くたび、元気に育っているかなーと、また一つ楽しみが増えました。(前田記)

光陽の里だより

光陽の里、楽農会では共同栽培を企画中である。以前、行った大豆の共同栽培の方式で耕起、鳥よけ、畝作り、ニーム撒き(虫除け)を共同で行い、参加者に畝を割り当て、種まき、雑草取り、収穫は各自が行うというものである。最初は大豆を考へている。これは参加意識を高めて貰うためと技術の習得のためであり、会員以外にも広く募集をかけようと思う。大豆以外にも蕎麦、蒟蒻が候補に挙がっている。希望作物があればどしどし役員に提案して欲しい。5月の草刈りの案内と同時に品種を決定し、募集をかけるつもり、お楽しみに……

「大豆は簡単ですよ、すぐに作れる、ただね、鳥が……よほど鳥対策をうまくやらないと鳥の餌作りに終わってしまう……」という話を聞いたことがある。また枝豆のうまいこと、あれ！枝豆って大豆の若い奴って知ってました。英語でヤングソ

イビーンズ(若い大豆)って言うんですよ。そういうば、ミシガンから来た大学の先生、えだまめを殻ごとバリバリやってたから「うまいですか?」って聞いたたら「殻が固い」「俺たちは殻は喰わない、中の実だけ味わう」って言ったら恥ずかしそうにしてたっけ。(松井記)

本の紹介

「里山資本主義」

「マナー資本主義への警告」

藻谷浩介氏(日本総合研究所研究員)とNHK広島取材班の共著で、その中にいくつもの事例紹介がある。

中国地方における里山の一次産品の加工について工夫を凝らした事例紹介がある。

瀬戸内海の離島で各種のミカンジャムを作る事例や中国山地で木質ペレットを原料とするエネルギーで域内のエネルギー需要をまかなう事例など。海外におけるオーソリア自国の木材だけで国のエネルギーを供給しようとする壮大な

エネルギー政策などである。また耕作放棄地の活用事例もあり、里山は「水・食料・エネルギー」の宝庫であり、それを活用しない手はないとの提言である。

本書は1000兆円に及ぶ国債を抱えながら、まだ目先の経済的な繁栄を追う現在日本の風潮に一石を投ずるものであり、「マナー」に縛られない新しい価値観の提言でもある。

学園花の村「倉馬の里」も里山である。わらび園・果樹園の造成、原木による椎茸栽培、梅ジャム・お茶ジャムの試作など里山の恵みを活かす試みはすでに始まっている。

「里山資本主義」と学園花の村の「みんなで作ろう小さい農業」の思いは軌を一にするものである。ご一読をおすすめします。

「里山資本主義」 角川書店発行
定価 781円

(藤本記)